
温かい手

霜月 沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温かい手

【Nコード】

N8702R

【作者名】

霜月 沙羅

【あらすじ】

高梨くんが好き。もう少し早くこの気持ちに気付いていたら、夏希ちゃんと上京なんてしなかったのに。

忘れもしない、二月四日、寒い冬の日だった。その頃の私は酷く内気で、自分一人だったらとても高梨くんとは会えなかっただろう。待ち合わせ場所には既に高梨くんと夏希ちゃんがいた。私は走って二人に駆け寄って、

「お待たせ」

と言った。高梨くんはにこっと笑って、

「じゃあ、行こうか」

と言い歩き出した。満員電車に乗ると、高梨くんと身体が密着し、顔が側にあって私はドキドキした。心臓の音、聞こえてないかな。私はうつむいていた。

「森野さん」

名前を呼ばれたので顔を上げると、高梨くんと目が合った。

「車酔いとか大丈夫？」

「あ、うん、大丈夫！」

「良かった。中川さんは？」

「大丈夫だよ」

夏希ちゃんが答えた。高梨くんの気遣いが嬉しくて、顔がにやつきそうになる。電車が止まりドアが開いて、夏希ちゃんは棒に掴まっただけで、私は手すりにも棒にも届く位置ではなかった。人の流れに身体をさらわれそうになる。すると高梨くんは肩を抱いてくれた。温かい。窓の外の景色が変わってゆく。少し雪が積もっていた。

「楽しみだな」

私が言うと夏希ちゃんも、

「ね！」

と言い、

「そうだね」

と高梨くんも言った。二人と一緒にならどこへ行くのも楽しいけどね。でも夏希ちゃんになら言えるけど高梨くんには言えないな。

栃木に着くと、埼玉にいたときより断然寒かった。すぐに手が冷たくなり、白い息を吐いて手を温める。ホームを出て、雪の道をざくざくと歩く。

「すごい、銀世界だね」

私が言うと、

「うん」

と高梨くんは頷いた。高梨くんの家は駅から歩いて十分くらいのところにある。

「森野さんたちは一緒に住んでて喧嘩とかしないの？」

高梨くんの問いに夏希ちゃんが答える。

「しないよねー」

「う、うん」

私と夏希ちゃんは大学生になり、学校も同じだから地元の栃木を離れて東京で一緒に住んでいる。

「ホームシックにならない？」

「マナちゃんがいるから大丈夫」

いいな、夏希ちゃん平気で高梨くんと話せて。私は恥ずかしくて顔もまともに見られない。昔は何とも思わなかったのに。私たちは高校の部活仲間だ。高梨くんが好きなんだと気付いたのは、高校の卒業式、泣いている私の頭を高梨くんが撫でてくれたことがきっかけだ。気付くのが遅かった。もう少し早かったら、地元を離れるなんて選択肢を選ばなかった。上京してもうすぐ一年だ。

「あそこだよ。僕の家」

高梨くんがアパートを指差した。

「綺麗なアパートじゃん」

「ね」

高梨くんの部屋に辿り着くと、

「上がって」

と彼が言った。

「お邪魔します」

「……お邪魔します」

あ、高梨くんの匂いだ。部屋は綺麗に片付けてあり、タンスの上にぬいぐるみが三つある。

「このぬいぐるみ、可愛い」

ぬいぐるみに触れたら落としてしまった。拾おうとした私の手と高梨くんの手が重なる。

「あつ、ごめん！」

私は素早く手を引っ込めた。高梨くんは少し笑って、ぬいぐるみを元に戻した。

「森野さん、ぬいぐるみ好き？」

「うん」

「なら、これあげるよ」

そう言ってさっき落としたぬいぐるみを私に手渡した。

「え……いいの？」

「そろそろ嫁に出す時期だ。お父さん、寂しいけど」

私は思わず笑ってしまった。

「ありがとう。もらうね」

夏希ちゃんは私たちを微笑みながら見つめていた。

「あ！ 私栃木に帰ってきたら実家寄って言われてたんだ！
っ
てことで私は一度おいとまさせて頂きます」

夏希ちゃんはその言って、玄関に向かった。私は慌てて後を追いかけて、小声で、

「困るよ、夏希ちゃん」

と言った。

「マナちゃんなら大丈夫。頑張れよ」

そう言って親指を立てる。そっか、私に気を使ってこの場を離れるんだ。心遣いは嬉しいけど、高梨くんと二人きりになったらどうしていいか分からない。

「じゃあね」

ドアが閉まる。

「中川さんって元気だよね」

高梨くんが言った。

「うん……」

やっぱり、元気がいい子の方が好きなのかな。もしかしたら、今日誘ってくれたのだって私はおまけで本当は夏希ちゃんと会いたかっただけかもしれない。でもね、私は一年間ずっとあなたを想っていたんです。たまに来るメールに狂喜していたんです。すぐさま返信して、返事が返ってくるまでの時間ドキドキしっぱなしだったんです。

「どうする？ 映画でも見に行く？」

「あ、そうだね」

この部屋で高梨くんと二人きりなんて死んでしまいそう。だから、私は話に乗った。

映画館に着くと、

「何見る？」

と高梨くんが訊いてきた。

「あ、私は何でも」

「やっぱり女の子だから恋愛ものが好きなのかな」

女の子。少なくとも異性として見られているんだ。私は否定せずに、恋愛映画を選ぶことにした。私がお金を払おうとすると、

「いいよ、僕が払うから」

と言って三千円出した。

「そんな、悪いよ」

私、高梨くんの彼女でもないんだし。でも高梨くんは精算を済ませてしまった。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

始まった恋愛映画は、片想いの主人公が男の子に告白するという

もの。二人はめでたく結ばれ、キスをした。私はちらっと高梨くんの方を見る。すると、高梨くんも私を見ていた。先に目を逸らしたのは高梨くんの方だった。私はコーラを飲み、気付かなかったふうを装う。しかし、私の手の上に高梨くんの手が重ねられた。私は再び高梨くんを見る。高梨くんは視線を合わせようとしない。顔が火照る。嬉しいけれど、恥ずかしい。映画が終わるまで、彼の手は重ねられたままだった。

「面白かったね」

高梨くんはさっきのことなどなかったかのように爽やかな笑顔でそう言った。

「う、うん」

真意のほどを知りたかったが、あいにく私には訊いてみるという勇氣は持ち合わせていない。

「森野さん、右歩いた方がいいよ。ここ、交通量多いから」

「あ、うん、分かった」

ちょっとした気遣いが私の心をぽかぽかにする。

「寒いね」

時刻は夕方。冷え込んできた。すると、高梨くんが、

「ほら」

と言って手を差し出してきた。

「手、繋げばあったかいでしょ」

私の心臓が高鳴る。もしかして……と思うのは自惚れだろうか。私もそっと手を差し出すと、高梨くんがぎゅっと私の手を握った。大きな手。温かい手。このまま雪になって溶けてしまってもいいと思えるほどの至福のとき。

「中川さん、いつ頃戻ってくるんだろうね」

「高梨くん……」

「何？」

「夏希ちゃんのこと、好きなの？」

私は何ていうことを訊いているんだろう。私が訊きたいのは、そ

んなことじゃないのに。

「中川さんは友達だよ」

心臓がバクバクしている。この一言を言ったら、全てが終わるかもしれない。もうメールが来ることもなく、会うことも二度となくけれど、訊かなくちゃならないんだ。繋いだ手が勇気を与えてくれた。

「じゃあ……私は？」

高梨くんは足を止めて私を見た。駄目。目を合わせられない。

「こっち見て」

優しい声で高梨くんが言った。私は恐る恐る顔を上げる。

「ありがとう」

「え？」

「僕、森野さんとうちやって手を繋ぎたかったんだ」

それって、どういう意味……？

「好きだよ」

一瞬、時間が止まったような気がした。

「う、そ……」

「嘘じゃないよ。僕、森野さんのことが好きなんだ」

私は手を離れた。高梨くんは少し哀しそうな顔をした。

私は、高梨くんを抱き付いた。

「え、森野さん？」

「好きなの。私も好き」

私の身体は震えていた。寒いからじゃない。思ってもいなかった展開に鳥肌を立てていた。

「森野さん」

高梨くんはぎゅっと私を抱きしめた。

「ずっと、一緒にいてくれる？」

「勿論」

私は答えた。しばらくして高梨くんは私から身体を離すと、
「ありがとう」

と言って頭を撫でてくれた。

「そうそう、これ、受け取ってもらえるかな」

高梨くんはバッグから四角い箱を取り出した。

「何？」

そう言いながら箱を開ける。するとそこには指輪が入っていた。

「私にくれるの？」

「うん」

私はさっそく左手の中指にはめてみたが、ちょっときつい。

「薬指にはめてみてよ。彼氏からの贈り物なんだし」

彼氏。まるで夢みたいだ。誰とも付き合ったことのない私に、恋人が出来るなんて。薬指にはめると、ぴったりだった。

「中川さんに森野さんの指のサイズ訊いたからね」

ということは、夏希ちゃんはこの展開を予想していたのだろう。

あの笑顔はそういう意味だったのか。

「すごく嬉しい。ありがとう」

「良かった」

高梨くんの笑顔。温かいな。私はまた高梨くんと手を繋ぎ、歩いていった。

（後書き）

読んで下さりありがとうございます！甘い恋愛ものを書こう！と思って執筆しました。私にはこれが限界です（笑）。では、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702r/>

温かい手

2011年3月23日20時25分発行